

やなせたかし絵本三部作の研究
 -原作絵本『あんぱんまん』を中心に-

キーワード：絵本 絵本モンタージュ 読み聞かせ 正面性 色彩

鳴門教育大学大学院 伊藤 慶

はじめに

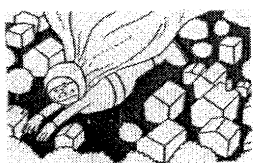
この研究は、“絵本とその読み聞かせ”が、どのような国語教育機能を持つかを明らかにする分析の一環としておこなう。

そのため本研究は、絵本の受容について、視覚的には絵本の絵に集中しながら、同時に聴覚から物語を受容することができる“絵本の読み聞かせ”を基本としている。

この研究の前提として、“絵本の読み聞かせ”において、絵と言語との仕掛けが、聞き手にどのような内的過程を生成する可能性を持つかの分析に取り組んでいる。

今回の考察では、絵本の読み聞かせを前提としつつ、子どもが絵本の登場人物に対して、何を感じるのか、また、そのように感じさせる「仕掛け」は何なのかを明らかにするものである。

今でこそ国民的キャラクターとなった「アンパンマン」であるが、初めて絵本として描かれ、出版されたときは不評であった。出版社の人は、やなせたかしに、「あれはやなせさんの本質ではない。もう二度とかかないでください」と言った。やなせ自身も売れないと予想していた。確かに、あんぱんまんは、今でこそ何の違和感もなく受け入れられているが、主人公がお腹を空かした人に頭を食べさせるという行為そのものは、カニバリズム(人肉嗜好)的で奇妙である。「やさしいライオン」で名前の売れたやなせが、何故このような絵本をかいたのか。出版社や専門家が、あんぱんまんに対して批判的になることは必然的であったといえる。



絵本「あんぱんまん」が出版されたのは、1976年であるが、1973年にフレーベル館の保育園・幼稚園向けの月刊絵本

「キンダーおはなし絵本」に登場している。それ以前に描かれたあんぱんまんは、現代の「アンパ

ンマン」とは、全く違った姿で、普通の人間である。このあんぱんまんは、世間でほとんど認知されていない。

あんぱんまんを最初に認めたのは、2歳から5歳までの幼児であった。つまり、保育園・幼稚園であんぱんまんを目にしていた幼児は、無視され続けていた絵本『あんぱんまん』を受け入れたのである。やなせは自伝の中で、「幼児向きに描かれていない『あんぱんまん』がなぜ幼児にうけてしまうのか。それは今でもぼくにはよく解らない。」と書いている¹⁾。あんぱんまんはなぜ子どもたちに受け入れられたのか。2歳といえば、たとえ読み聞かせを聞いたとしても、内容をよく理解するのは難しいであろう。つまり、絵本の文章よりも、描かれている絵に興味を示したことになる。

字も読めない幼児を引き付けるあんぱんまんの魅力とは何か。1976年に出版された絵本『あんぱんまん』を分析し、あんぱんまんの魅力を再確認したい。

本研究において、絵本の分析は、主に次の3点を中心に行っている。

a) フロントリティ (長谷川集平, 1988)

絵本における正面顔の有用性は長谷川(1988)で「フロントリティ(正面性)」という言葉で説明されている。絵本におけるフロントリティは単に顔が正面を向いているだけではなく、登場人物の両目が描かれていることとする。フロントリティは読み手の共感を得ると考えられる。

b) 色彩

絵本の中に使用されている色彩を分析し、登場人物の心情を作者はどのように描きたかったのか、読み手が何を感じるのかを考察する。主に、赤・青・黄を中心に分析する。

c) バランス

主人公の体のバランスを知ることにより、どれだけ共感もてるのかを考察する。多くの絵本のキャラクターが二頭身半で描かれていることは、

二頭身半が読み手にとって共感を得やすいバランスである。それ以外のバランスで描かれていることの意義を考えなければならない。

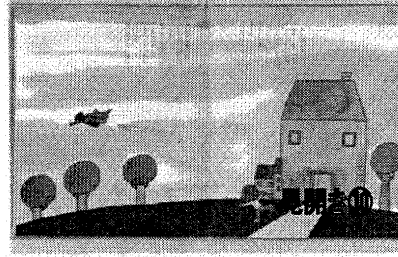
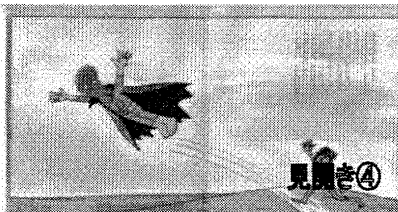
以上3点を中心に絵本『あんぱんまん』を分析していく。

1. 絵本『あんぱんまん』の分析

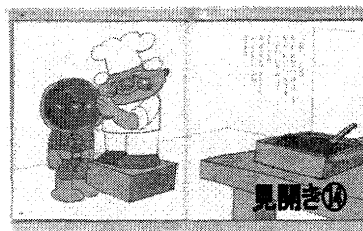
1-1. フロントリティの分析

原作絵本『あんぱんまん』では登場人物のフロントリティ(正面性)が頻繁に変化する。

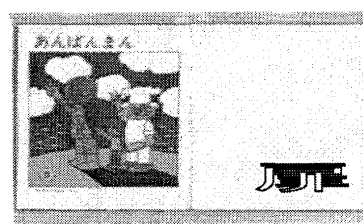
表紙では主人公であるあんぱんまんが丸い大きな正面顔で描かれているが、見開き④



では旅人に食べられたことにより半分になる。また、この時目が片方になってしまう。つまり、フロントリティ(正面性)を喪失している。しかし、見開き⑤ではさりげなく両目に戻っている。このことにより、フロントリティ(正面性)が復活し、読み手はあんぱんまんに共感を持つことができるようになる。そして、見開き⑨では子どもに顔を食べられ、半分になり、見開き⑩では完全に顔が無く



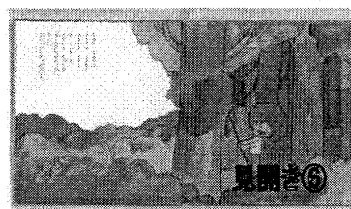
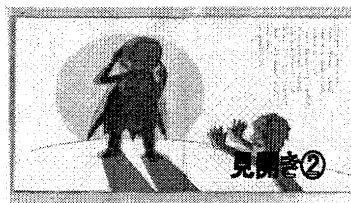
なりフロントリティ(正面性)を完全に喪失する。見開き⑭で、パンづくりのおじさんにより顔が再生され、これまで登場したあんぱんまんの中で一



番大きな顔となり、読み手からの絶対的な共感を得ることになる。

1-2. 色彩の分析

表紙では、主人公であるあんぱんまんに赤色・黄色を用いる一般的なものであるが、鎮静色である青系の色を一切使っていないのが特徴である。また、扉では、空の青色、人物の赤色、地面の黄色、赤色の補色である海の緑色、雲の白色、影の黒色、整理すると、赤・青・黄・補色緑・白・黒とバランスのとれた色彩となっている。しかし、



青色を大胆に使用していることにより、表紙に比べて、主人公であるあんぱんまんを受け入れにくくなる。見開き②では、初めてあんぱんまんが体全体を現すものの、紫色で描かれ、読み手はストレートにあんぱんまんを受け入れられない。しかし、その後のあんぱんまんは茶系の赤色で顔が描かれ、

安心感がある。そして、紫色や青色といった、不安を表す色彩は、見開き⑥や見開き⑦のように迷子になった子どもの不安な気持ちとして、木や

背景に使われるようになる。

1-3. バランスの分析

あんぱんまんの体のバランスは作品中、頻繁に変化する。

表紙では二頭身半でバランスがとれているのだが、扉では四頭身になり、共感を得ることが難しい。さらに、物語中初めて体全体を現す見開き②でも、四頭身である。そして、見開き⑩では顔を全て食べられてしまう。しかし、見開き⑭で顔を復活すると、二頭身半になり、最終的には読み手を満足させる仕掛けとなっているといえる。

おわりに

やなせは絵本『あんぱんまん』のあとがきで次のように書いている。

「私たちが現在、ほんとうに困っていることといえば物価高や公害、飢えということで、正義の超人はそのためにこそ、たたかわねばならないのです。」

日本国内では1970年前後、公害問題が発生していた。高度経済成長のあおりを受けて、物価高が顕著に現れた時代でもある。世界では、ベトナム戦争が終戦に近づきつつある時代でもあった。そんな中、ウルトラマンやタイガーマスクといった悪を懲らしめる『正義のヒーロー』が人気を呼ぶ。時代が正義のヒーローを求めているのだろうか。

あんぱんまんは絵本の中で、人を空腹から助けているだけである。旅人も子どもも決して何かに襲われていた訳ではない。ただパンを分けているだけである。正義のヒーローと言うよりも、親切な人である。正義のヒーローよりも近い存在。親切な人とは、子どもにとって身近に存在する親であり、保育士であり、先生なのかもしれない。

『あんぱんまん』の分析をして、子どもに興味を引かせた仕掛けをいくつか発見できた。

一つ目は、あんぱんまんの丸い大きな正面顔（フロンタリティ）である。丸い正面顔と、節穴の目は、子どもに愛される。しかし、その丸い正面顔は物語の中で欠落し、喪失し、復活する。欠落し、片目になったあんぱんまんに子どもは、不安を感じ始める。そして、顔を完全に喪失したあんぱんまんに対してその不安は確実なものとなる。しかし、あんぱんまんの顔はぱんつくりのおじさんに

よって、完全な復活を遂げ、再び子どもはあんぱんまんを愛するようになる。絵本の仕掛けとして、主人公を後ろ向きに描き、正面顔（フロンタリティ）を喪失させているものはよく見かける。しかし、あんぱんまんのように、物理的に正面顔（フロンタリティ）を喪失させる描き方は稀である。

二つ目は、色彩である。あんぱんまんの顔の多くは茶系の赤色で描かれていた。赤色は読み手を一番引き付ける色である。さらに、赤色を引き立たせる補色の緑を利用し、あんぱんまんの顔を強調している。しかし、あんぱんまんが最初に登場する見開きでは、顔は紫色である。読み手を不安にさせる仕掛けである。しかし、その後、紫色の顔は出てこない。代わりに、紫色や青色が迷子になった子どもの不安な気持ちとして、木や背景に用いられるようになる。

三つ目は、あんぱんまんの体のバランスが変わっていることである。表紙のあんぱんまんは二頭身半だが、扉のあんぱんまんは四頭身である。四頭身のあんぱんまんは、読み手に共感を持たせにくい。そして、あんぱんまんは顔を全て食べられてしまう。顔のないあんぱんまんは、奇妙であり、不安を思わせる。新しい顔が出来上がると、あんぱんまんは二頭身半になった。四頭身のあんぱんまんから、顔のないあんぱんまん、そして二頭身半のあんぱんまんへと変わっていく様子は、最終的に読み手を満足させる仕掛けとなっている。

以上の3点こそ、絵本「あんぱんまん」が子どもに受け入れられた大きな要因となっていると考えられる。

その後の「アンパンマン」は完全に二頭身半である。

「アンパンマン」の原点である『あんぱんまん』は、「奇妙な絵本としてすぐに忘れられると思った」と、やなせは自伝の中で述べている。しかし、純粋無垢な幼児たちの目は、何の先入観もなしに「あんぱんまん」を認めたⁱⁱⁱ。

引用文献・参考文献等

やなせたかし絵本作品

- 1・キンダーおはなしえほん傑作選8 『あんぱんまん』 やなせたかし 作・絵
フレーベル館 1976年5月 第1刷発行 2002年6月 第48刷発行

引用文献

- 1・やなせたかし (1995) 『アンパンマンの遺書』岩波書店
- 2・やなせたかし (1997) 『アンパンマン伝説』フレーベル館

参考文献

- 1・岩井 寛 (1986) 『色と形の深層心理』日本放送出版協会
- 2・小島尚美 (2002) 『色の辞典』西東社
- 3・佐々木宏子 (2000) 『絵本の心理学—子どもの心を理解するために』新潮社
- 4・末永民夫 (1998) 『色彩心理—心を元気にする色のはなし』PHP研究所
- 5・千々岩英彰 (2001) 『色彩学概説』東京大学出版会
- 6・出村洋二 (1998) 『クロマチクス—色彩論』昭和堂
- 7・中川素子 今井良郎 笹本純 (2001) 『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部
- 8・長谷川集平 (1988) 『絵本づくりトレーニング』筑摩書房
- 9・藤本朝巳 (1999) 『絵本はいかに描かれるか (表現の秘密)』日本エディタースクール出版部
- 10・やなせたかし (2003) 『痛快! 第二の青春—アンパンマンとぼく』講談社
- 11・やなせたかし (2005) 『人生なんて夢だけ』フレーベル館
- 12・山口真美 (2003) 『赤ちゃんは顔を読む』紀伊国屋書店

注

i やなせはアンパンマンの誕生から現在に至るまでをまとめた『アンパンマン伝説』の中で、絵本『あんぱんまん』に対する出版社側の印象について「・・・『アンパンマン』は空振りで、手ごたえはまったくといっていいほどなかった。「もう二度とあんな本をかかないでください」と、言われる始末であった。」と述べ、絵本『あんぱんまん』が不評であったことを示唆している。(やなせたかし『アンパンマン伝説』フレーベル館 1997

p.10)

ii 絵本『あんぱんまん』が幼稚園や保育所で人気が出てきたことに関して、やなせは「幼児向きに描かれていない『あんぱんまん』がなぜ幼児にうけてしまうのか。それは今でもぼくにはよく解らない。」と述べているため、やなせ自身は絵本『あんぱんまん』の人気について確実な答えを出せていない。(やなせたかし『アンパンマンの遺書』岩波書店 1995. p.181)

iii 絵本『あんぱんまん』において、「あんぱんまん」が継ぎ接ぎのマントを羽織っていることをやなせは『アンパンマンの遺書』で次のように述べている。

「正義のためにたたかう人はたぶん貧しくて新しいマントは買えないと思ったからだが、今の子供達に受け入れられるとは思わなかった。奇妙な絵本としてすぐに忘れられると思った。」(やなせたかし『アンパンマンの遺書』岩波書店 1995 p.169)。